
英雄(こども)達の代理戦争

遠名 竹義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こども
英雄達の代理戦争

【Nコード】

N7713T

【作者名】

遠名 竹義

【あらすじ】

核融合を利用した大量殺戮兵器を手にした人類は、互いに相手に使われることを恐れ、戦争ができなくなってしまふ。そこで考え出されたのが、チルドレン解放児と呼ばれる、遺伝子の解放によって人外の力を得た子供100人ずつによる代理戦争だった。死と絶望に溢れた戦場で主人公は、それでも希望を失わない少女と出会い自らの道を定めていくことになる……

最も醜き英雄の姿と、真の善悪を描いた、SFファンタジーです

序章

後の歴史家は誰もが彼に対して最悪の評価をつけるだろう。

今ですら、ネロ帝の再来だとか、ヒトラーの後継者だとか、面と向かつて言えるものはいないが、陰でこっそり話されているのだ。

本人を知らない後世の人々がどのような判断を下すのか、想像するに難くない。

だからと言って僕は別にそのことを否定したいわけじゃあない。

確かに彼は多くの人を殺してきたし、それより遥かに多くの弱者を踏みにじってきた。

客観的に見ても悪としか言いようがないし、また彼自身も自分の悪性に気付いていたようだった。

ただ、そこから単純に彼をただの悪だと断じてしまうことは間違いであると、僕は思う。

彼はただただ必要悪だった。より多くの人間を救うために、平和などまやかしだと自身が一番よく知っていながらも争いの絶えた未来を求めて、悪という十字架を背負ったのだ。

僕は彼の姿を誤解なく伝えるためにここにこれを記す。

―カラディリア新政共

和国宰相、シユンの手記より抜粋―

第一章

欲望は果てしない。それはもはや言うまでもないことだが、人類のそれは遥かに行き過ぎてしまったらしい。

コロニックボム。

西暦2576年に完成してしまった、人類史上最強最悪の大量破壊兵器はそう名付けられた。

核融合により膨大なエネルギーを放出するそれは、たった一発で地球のおよそ半分の体積を、跡形もなく吹き飛ばしてしまうとゆう計測結果がでている。

そしてかろうじて残った大地も膨大な放射能に汚染され人はおろか生物がまともに生きていける環境ではなくなってしまう。

もっとも半分になった地球は重力や軌道などの問題から、そのまま残るとは考えられないが。

ともあれ、あまりにも強力な兵器の誕生は逆に人々から争いを奪う結果となった。

戦えば、敵も味方も第三者も等しく破滅。

それでもなお戦おうとする程には、人類は狂っていなかったのである。

ただ、だからといって世界中から争いをなくしてしまえるほど、人類は賢くもなかった。

人の歴史は闘争の歴史とイコールである。

文明の発達の裏にも、文化の発展の陰にも、常に醜い争いは付きまとった。

本能的に人が持っている闘争本能を抑えることは不可能だった。

そこで人々、とくに各国のお偉いさん方は過去に学ぶことにしたらしい。

太平洋に浮かぶ巨大な人工島。周囲を高くそびえる壁に覆われたその内側に、各国100人ずつの兵士を投入し、殺し合いをさせることにしたのだ。

さらに科学の方針の変化がその「戦場」にさらなる悲劇をもたらした。

コロニックボムの開発で化学や物理学を突き進めることに恐怖した人類は、その代替としての役割を「生物学」に求めた。

人の使う道具を発展させることよりも、「人という存在そのもの」を進歩させようとしたのである。

そこで人間が目をつけたのが、遺伝子である。

21世紀以後も相変わらず、たったの3%しか解析されていなかった遺伝子の残り97%に進化の手掛かりがあると考えたのである。

そしてそれは結果的に正しかった。人の体に秘められていた遺伝子を解放していく中で、特異な力を持つものが現れた。まぎれもなく物理法則に反していながらも、生体科学的には存在しうる力。人々はそれを「GL^{ゲノム・リベレート}」と呼んだ。

たとえばここに「任意の場所に、力場を発生させる」というGL^{ゲノム・リベレート}を持つ者がいたとしよう。

自在に力場を形成するなど明らかにありとあらゆる物理法則に反している。

しかし、その体を調べてみると普通の人間には存在しない、「力場を生成するための器官」が確認されるのだ。つまり「力場を作り出す器官をもつ」という遺伝子が人間の細胞の中に埋もれていたのである。

そして遺伝子をいじった上でGLが発生する最低年齢の、6歳以上

の少年少女が、人類の闘争本能を満たすための生贄となっているのである。

第二章

一面に広がる荒涼とした大地。

草木の一本すら見当たらない死んだ大地は、しかしその少年の目には映っていなかった。

一際大きな岩のてっぺんに腰掛け、短い黒髪の少年はただ漠然と空を眺める。

上空が、閉ざされたこの戦場において、唯一外とつながっている場所だった。

だが、少年のひとみには外への憧れのような純粹な感情はなく、ただ諦めにも似た感情が渦巻いているだけだった。

この戦場にいる子供は、研究所で遺伝子操作された状態で生まれ一定の年齢になるとここに連れて来られる。彼らが知っているのは、この周囲を囲まれ閉ざされた戦場と、無機質な研究所の風景だけである。

とはいえすでに3度の戦争を経験している彼が普通の『外』の子供と同じような無邪気さを持ち合わせているはずもなかった。

ふと彼は視界の端でなにか動いたような気がして視線をしたへと転じた。

下を見ると少年より少し年下ぐらいの、鮮やかな金髪の少女が、両手で大きな容器を抱え、ゆっくりと歩いてきていた。抱えている容器が少女の体と同じぐらいの大きさがあるので、完全には支えきれずときどきふらついている。そんな少女の様子を、少年は特に近寄るでもなく、かといって遠ざかるでもなく、そのままの状態でぼんやりと少女を見ていた。この戦場においては他人を助けるような行動をとる人間はまずいない。むしろ問答無用で攻撃をしないだけ温厚な対応だといえる。

ゆっくりと近づいてきていた人影は、15分ほどで少年のもとにたどり着いた。

「はあ、はあ、はあ、こ、こんにちは。」

かなりつらそうに少女はあいさつをした。手に抱えている入れ物があまりに大きい原因だろう。それに少年の記憶が正しければ、この近くには『コロニー』はなかったはずだ。この少女はかなりの距離を歩いてきたのだろう。額にびっしりと汗が浮かんでいる。だがそれでも少女の明るい雰囲気はそこなわれていなかった。

「よう。」

少年は手を軽く上げて挨拶を返した。

「ふう、あなたはこうしてここに？」

先ほどまであんなにも乱れていた呼吸が、もう整い始めている。

（身体能力の強化、か）

少年は内心でそうつぶやいた。

遺伝子の発現、ゲノムリベレートGLにおいて最も多く行われているのが、身体能力の強化だ。程度の差はあれ、ほぼすべての兵士に行われている処理である。おそらくこの少女もある程度の身体能力の強化はされているのだろう。常人離れた肺活量がそれを物語っている。

「おれか？おれはまあ、なんてゆうか、空を見に来たんだ。」

少年は少しつかえながらそう答えた。とはいっても嘘をついている様子は無い。実際少年はここから見る空が気に入っていた。とゆうのも、ほかの場所からではこの戦場をぐるりと取り囲む城壁が視界に入り、全体の3分の2ほどしか見えないのだ。しかし、この高く盛り上がった岩山の上からなら360度全方位に広がった空を、余すところなく見ることができる。

空は、地上を閉ざされた少年たちにとってまさしく希望の象徴のようなものだった。例えばそこから出ることはできないとわかっていても。

「そうだったんですか。わあ、確かにここからなら空がよくみえますね。」

少しはしゃいだように少女は笑った。

その笑顔を見て少年は思う。他人の笑顔なんて見るのはいつ以来だ

ろうか、と。

じつと顔を見つめる少年の視線に気づき、少女ははしゃいでいた先ほどまでの自分を恥じて、わずかに頬を赤く染めた。そしてはつと
して言った。

「そ、そういえば自己紹介がまだでしたね。わたしはティリアとい
います。」

少女はぺこりと頭を下げた。それにしても警戒心と敵意の薄い少女
である。

いくらまだ戦争の敵国になっていないとはいえ、いつ戦争になり殺
しあつかわからない相手である。ほんらいなら、悠長に挨拶などし
ている場合ではない。しかし少女の無垢な態度に毒気を抜かれたの
か、少年も少しだけ警戒を解き、挨拶を返してしまった。

「俺はリュウだ。」

名前を告げ、しかしすぐに皮肉気に顔をゆがめた。

「だが名前なんてここじゃ所詮ただの記号だろ？教える意味なんて
……」

「そんなことないです!!」

やや強めの声で少女——ティリアは少年、リュウの言葉をさえぎつ
た。しかしすぐに自分が感情を高ぶらせていることに気づき、少
間を開けてからつづけた。

「そんなこと、ないです。名前は私たちの生きている証です。コロ
ニーの識別コードなんかとは違うと思います。」

「……………」

リュウはその言葉に反論できなかった。いや、反論するだけならい
くらでもできただろう。しかしティアの持つ純粋な思いを否定した
くはなかった。このような死と絶望にまみれた場所で、これほどま
でに希望を持ち続けていられることが奇跡のように思われのだ。

「あの、その、ええと、すいません、偉そうに」

ティリアはリュウが突然黙ったので気に障ったのかと思い、ぺこり
と頭を下げた。

「いや、それはいいんだけどよ。」

リュウは少女が抱えているものを指差した。

「それに水を入れるために来たんじゃないのか？」

「へ？……あつ、そ、そうでした！！」

あわてて水の湧いている場所（人口なのか自然なのかはわからないが）へとティアは駆けていった。まだ戦争が始まっていないとはいえ、のんきな少女である。

「ああいうやつとはできるだけ戦いたくないもんだが……」

リュウは後の言葉を飲み込んだ。いうまでもなく戦う相手を選ぶことはできない。いざ戦争が始まってしまえば、「戦いたくない」など自殺志願者のたわごとぐらいにしか見なされないだろう。殺^やらなければ殺^やられる、というのはいつの時代でも戦場の掟である。

「さて、俺も帰るとするか。」

それでも、さきほどの少女——ティアと戦うということを考えると、なぜか少しだけリュウは心が沈んだ気がした。

第三章 平穩（前書き）

少しずつ事態は動き始めます

第三章 平穩

「おつそーい！いったいどこでなにやってたのよ……って、まあ大体想像は付くけどね。」

リュウが所属するコロニー——第十三コロニーに帰ってきてから、最初に聞いた声がこれだった。

リュウは声の主へと視線を向けた。そこにいるのは一人の少女だった。外見的な年齢はリュウと同じくらい（とはいえ各種の人為的な操作によって成長を早めたりできるため、肉体年齢≠実年齢とはならないのだが）。そこそこ短めの髪に活動的な服装のいかにも、はつらつとした雰囲気少女である。

——もっとも、今はやや不満げな表情をしているため、その雰囲気も若干薄れてはいたが——

「どうせまた空でも見にいったんでしょ？」

少女はリュウの行動パターンを把握しているのか今までリュウが何をしてきたのか当ててみせた。

まあ、施設の培養槽から出て初めて話すのが同じコロニーの人間で、そのまま同じメンバーのまま（減ることはあるが）過ごすのだ。相手の特徴ぐらい覚えていてもおかしくはないが。

「別に、どうだっていいだろ、リンには関係ないし……」

リュウは自分の行動パターンが把握されていることが恥ずかしいのか、そうつぶやいた。それを聞いて少女——リンはいつそう^{まなじり}眦を
つりあげる。

「関係なんて……危ないじゃない、一人で外に出るのは。他のコロニーの人間に会ったらどうするのっ!？」

リンはリュウをにらみつける……実際についさっき出会ったのだが、それを言うとさらにリンが怒り出しそうな気がしたので、リュウは黙っておくことにした。

（それに、戦闘要員って感じじゃなかったしな）リュウは内心でつ

ぶやく。先ほど会った時に見た少女の手は多少汚れてはいたものの、あまり大きな傷はついておらず、割ときれいだった。このことから考えられる可能性は二つ。

一つは、手を触れることなく敵を瞬殺できるほどの強大な力を持っているということ。

もう一つは、直接戦闘をするような能力——GLではないということ。

前者の代表はこのコロニーのリーダー、後者の代表は治癒能力を持つリンということになるのだろうか。ともあれリュウはあの少女は後者だと思った。

「と・に・か・く！！早く行かないともう始まっちゃうよ。今から確か戦術論だったよね？まったく、なんで非戦闘員のあたしまでそんなこと勉強しなきゃいけないんだか……」

常に戦争のさなかにあるコロニーにおいても、一応教育は行われている。もつとも、リンの言ったような、『戦術論』だとかの直接戦闘に関わるもの、もしくは敵の能力を理解する助けになる科学的な分野に限定されてはいたが。

「まあ、分からなくもねえが、言っても仕方ないだろ。それより早く行かないとまた遅刻になっちゃうぜ？」

「確かにそうね……って、だからそれはあたしのセリフっ！！大体誰を待ってたと思って……」

またもや怒り出そうとしたリンの言葉をさえぎったのは、ジリリリリッという無機質な音だった。

それを聞いたリンは体を強張らせた。この『戦場』において非常時のサイレンの意味を知らない者など、おそらく皆無であろう。それは次の戦いを意味するものであるからだ。しかし、リンの反応の原因はそれだけではなく……

「うそ、前回からまだ一週間もたってないのに……」

前回の戦争においては、第十三コロニーは人的被害は一切なく、そういう意味では連戦も問題ないと言えた。だが、特殊な力を持つと

はいえまだ十代の子供である。精神的な疲労は計り知れないし、そもそも彼らは自分の意志で戦っているわけではないのだ。当然、戦いたい』などと思うはずもない。『

「……早く行くぞ。作戦会議に遅れる。」

リュウはそっけなく言った。この不器用な少年には他人の慰め方など分からない。その上今はもう一つ懸案事項があった。

（まさか……な）

頭をよぎるのは先ほど一度会っただけの、しかし妙に印象深い、あの少女の顔だった。

第三章 平穩（後書き）

次から何人かキャラクターが増えます（若干出てた人もいますが）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7713t/>

英雄(こども)達の代理戦争

2011年10月24日01時02分発行